

コロナに負けない「居場所」、オンラインで話し合う

キューピーみらいたまご財団の「サミット」に200人が参加

こども食堂や食育支援に取り組む団体を助成している公益財団法人キューピーみらいたまご財団が、「第6回地域の居場所づくりサミット」を6月13日に開き、200人が参加しました。協賛会社のキューピー（ベルマーク番号07）が2017年4月に設立し、これまで186団体に7651万円を助成してきた財団です。毎年、来場形式で行っていましたが、新型コロナ禍の影響で今回はオンライン方式に変更。テーマには、「新型コロナに負けない居場所づくり支援」が掲げられました。

第1部の活動報告では、「NPO フリースクール僕んち」と「竹園土曜ひろば」の2団体が助成金をどのように活用したか、動画で説明しました。

第2部は「食の居場所づくり講座」。初めに一般社団法人全国食支援活動協力会の専務理事、平野覚治さんがこども食堂などを対象に実施したアンケート結果を元に課題を探りました。

続いて2人のゲストが居場所づくりの経験を紹介。一般社団法人ともしび at だんだん代表理事の近藤博子さんは「こども食堂」の名付け親とされています。運営するこども食堂「だんだん」の、休校期間中の対応を話しました。「親御さんの悲痛な声が聞こえたので、自分たちに出来ることをしたい」と、調理が簡単などんぶり弁当を作り、1日30食、多いときは60食も提供したそうです。

NPO法人フリースペースたまりば理事長の西野博之さんは、不登校やひきこもりの子どもの「居場所づくり」に34年前から取り組んでいるこの分野の第一人者です。たまりばでは必ず昼食を作ることを続けています。西野さんは、一斉休校要請を受け、虐待やDVが増加する心配



①竹園土曜ひろばの主な活動は、対象を子どもだけに限定しない「ランチ交流会」 ②新型コロナ禍でも子どもたちが工夫して遊んでいることを説明する西野博之さん ③参加者は画面右側のチャット欄から質問することが出来た ④最後は手を振って「ありがとうございました」

が頭に浮かび、居場所を開けました。コロナとの共存にも着目し、「格差の拡大、生活困窮者の増加、不登校・ひきこもりの増加などの不安を抱えることになる。食を通じた『居場所の確保』が必要だ」と話しました。

最後に、東京ボランティア・市民活動センターの所長、山崎美貴子さんが「活動団体に寄り添って伴走してくれるキューピーのような企業・社会福祉協議会・民生委員



などの『中間支援組織』、行政、市民活動団体が繋がれば、地域を耕すことが出来る」とまとめ、居場所を皆で作っていく必要性を改めて訴えかけました。

キューピーみらいたまご財団の2021年度の助成事業募集については、10月に同財団ホームページで公開予定、また、公募期間は11月～12月初旬の予定です。

活動の「活性化」を目指して動画制作

大阪市立咲洲みなみ小中一貫校

大阪市住之江区の市立咲洲みなみ小中一貫校（清原良一校長、504人）の生徒が、動画「ベルマークを集めてみたよ!」を制作し、YouTubeで公開しています。マンネリ化していたベルマーク活動を「活性化」するために、令和元年度生徒会が「新しい取り組みをしたい」と要望を出したことがきっかけでした。2018年に、ベルマーク活動への生徒の参加意識を高めるため公開した動画「お隣さんは AKEMI」に続いて、2作目です。



今回の動画制作は、昨年夏から始めました。登場するパペット作りには美術部員4人で3日間かかりました。生徒会執行委員を務めていた増本美悠さん（8年）は「何回も作り直したり、パーツをなくしたり、土台に貼ったパーツがすぐはがれたり、いつ終わるのかと何度も思った」そうです。その後、台本を作って音声を録音。主役のあけみちゃんを演じたのは生徒会長の野見山こころさん（9年）です。「恥ずかしさを捨てて、全力でなりました。真面目なイメージの生徒会だからこそ、あえて面白さを入れた」と振り返ります。撮影も大変だったそうで、執行委員だった妹尾汰知さん（8年）は「どの位置から撮れば良い構図になるか、考えました」と話します。

生徒会だけでなく、美術部員や技術科、家庭科、美術科の教員からも協力して出来上がった動画は、今年4月にYouTubeにアップしました。生徒会副会長だった木村愛奈さん（9年）は「多くの人が『いいね、を押してくれたり、見てくれたりしたので制作してよかった。全国に届いてほしい』と願っています。生徒会担当の沖正樹先生は、「自主企画したものがひとつの作品や結果を生み出す過程を、今後も楽しんでほしい」と期待しています。

ベルマーク収集は、今では学校全体でも取り組むようになったそうです。「ベルマークデー」には小学生も児童会を中心にカートリッジの点数を数えます。日頃から地域の人も援助してくれるようになり、さらに年度初めの職員会議でもベルマーク活動を企画・立案するようになりました。2016年に、ベルマーク活動復活のきっかけを作った沖先生は「『ベルマークを集めて・数える学校』として定着してきたように感じる」と振り返りました。



今年度で開校3年目を迎える同校は、9年間を通じた学習プログラムの実践、小・中の枠を超えた発表会や大会の開催など、独自の取り組みに力を入れています。これからも9つの学年全体で、目標の「毎年、ベルマークでみんなが喜ぶ学校備品を購入すること」の実現に向けて頑張ってください。

休校中ベルマークに取り組んだ小4健斗さんからお手紙

休校中に自由研究としてベルマークに取り組み、家族で仕分けたマークを財団に寄贈した兵庫県の小学4年生、健斗さんから財団にお手紙が届きました。ベルマーク新聞6月号で健斗さんのことを紹介したのですが、それを受けて「がんばって自由研究をやったよかった」と振り返り、「日本のどこかでだれかの役に立ちたいという思いでベルマークの運動に協力したい」と書かれていました。マークがたくさん集まったらまた送ってくれるそうです。



コロナ禍だからこそ読書を「本の帯コン」作品募集中

児童向けの本の「帯」を小学生がデザインする「大阪こども『本の帯創作コンクール』」（大阪読書推進会、朝日新聞大阪本社主催）。第16回となる今年はコロナ禍と重なりましたが、そんな時だからこそ、子どもたちに読書の楽しさや大切さを知ってもらおうと、例年通り開催されています。賞の中にはベルマーク賞もあります。締切は9月3日（木）消印有効。課題図書の本名や帯の作り方、募集要項などは大阪府書店商業組合のホームページでご確認ください。問い合わせは大阪読書推進会事務局（06-6361-5577）へ。

